

DX とローコード開発について

1. はじめに

近年、あらゆる分野でDX（デジタルトランスフォーメーション）の推進が求められています。DXとは、デジタル技術を活用してビジネスモデルや業務を変革することを意味します。

DXが注目されるようになったきっかけの1つが、経済産業省のDXレポート（2018年）で言及された「2025年の崖」というキーワードです。既存の老朽化したシステムは、ブラックボックス化が進み、IT人材不足により保守の担い手が不在となるため、DX化が進まなければ、システムの保守や障害対応などで、2025年以降大きな経済損失を生じるといわれています。

2. ローコード開発の概要

「2025年の崖」を克服し、DX化を進める技術として注目されているものの1つがローコード（LowCode）開発です。ローコードとは、必要最小限のソースコードの記述という意味で、ローコード開発では、主にビジュアルモデリングにより予め用意されたプログラム部品を組み合わせ、システム開発を行います（図1）。そのため、ローコード開発では、プログラマー以外の担当者も開発可能になります。

一般的に業務システムは、データの作成・表示・検索・更新・削除のような定型的な基本操作機能だけであることが多いため、ローコード開発に向いています。

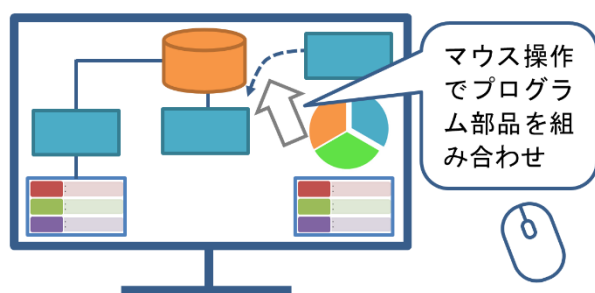


図1 ローコード開発のイメージ

ローコード開発用のソフトウェア（ローコード開発ツール）は、クラウド上の開発環境として提供されるため開発環境の構築が不要で、運

用もすぐにクラウド上でできるものが多く、ローコード開発プラットフォームとも呼ばれます。

具体的なローコード開発プラットフォームとして、マイクロソフト社のPower Apps、サイボウズ社のkintone、アウトシステムズ社のOutSystemsなどがあります。

3. ローコード開発の利点と注意点

ローコード開発による利点として、部品の再利用を進められるため、開発期間の短縮、品質の向上、高い保守性につながるなどが挙げられます。

Webアプリを最初から開発するには、データベースやWebサーバと連携する必要がありますが、高度な知識が必要となりますが、多くのローコード開発ツールでは、それらを意識することなく開発を進めることができます。

また、スマートフォンなど複数のデバイス、OSに対応するのは手間がかかりますが、ローコード開発ツールはモバイルアプリ対応のものも多く、短期間での開発を可能にします。

ローコード開発によりプログラミングの負担は減りますが、システムでどのようなことを実現したいか明確にする業務分析・設計は必要です。また、データモデリング（データベース設計）がしっかりしていないと、不適切なデータ構造で後々扱いにくいシステムとなってしまうので、注意が必要です。

4. おわりに

DXに関する取組みとして、産業技術センターでは2021年11月に「DX実現のためのオープンソースソフトウェア活用支援セミナー」を開催しました。セミナーでは、DXの概要とDX実現のための各種OSS（オープンソースソフトウェア）が紹介され、OSSのローコード開発プラットフォームであるプリザンターがデモ紹介されました。

当センターでは、DXを実現するための技術要素であるIoTやAIに関するセミナーや講習会も開催しております。ぜひご利用ください。